

メコン地域開発プログラムの淵源と意義

吉田恒昭

「メコン」は多くの読者にとってまだ馴染みが薄いかもしくない。しかし、この地域を旅すれば、失われた日本文化の原風景が色濃く残っていることに気がつく。モンスーン気候、稲作文化、そして仏教を我々と共有している。

メコン地域における越境協力は東西冷戦構造の崩壊とともにやってきた。しかし、長い歴史を振り返って見れば、この変化はこの地域が綿々と営んできた「当たり前」の姿に立ち戻ったのに過ぎないと私には思える。即ち、メコン地域はその別称である「インドシナ」の由来の如く、古来、中国とインドの巨大文明が行き交う海と陸の回廊であった。また、この地域は半島の宿命である大陸内部から放出されるエネルギーと外洋からの異端文明を結節する役割を担ってきたように見える。この視座はメコン地域を展望する上で極めて重要である。

西欧列強諸国がアジアを植民地化した時代にあっても、この回廊に形成された港市ネットワークは機能し、人々は縦横に移動し、交易の利益を最大限享受していた。近代国家が成立した時、彼らはモザイク状に構成された多民族国家となった。

前述した事柄はこの地域をして外部からの多様な価値に対して寛容で、教条的であるよりも実用主義を行動規範とする特性を付与せしめたように思える。この地域の比較優位である。

メコン地域の連携協力は一九八八年にタイの首相によって提唱された「インドシナを戦場から市場へ」に始まる。半世紀にわたって紛争騒乱に怯えていた人々への「平和の配当」を市場開放経済の導入によって達成しようと思図したのである。この動きを的確にフォローしたのが一九九二年から始まったアジア開銀による組織的・戦略的・実用的な越境プログラムである。これは急速に深化発展し、二〇〇二年には「大メコン圏サミット」が開催され、地域の成長・公正・繁栄を長期ビジョンとして共有する。越境協力を促進する標語は三つのC (connectivity, competitiveness, community) である。

メコン地域協力の核心である越境インフラ構築と共通政策の導入を特徴とする3Cの開発方式は今や中央アジア、南アジア、そしてアフリカに波及している。この開発方式は越境インフラ開発整備のメリットを各国が最大限内部化することを意図する。これらの具体的事例の幾つかが本特集で紹介される。

メコン地域は今後ますます目を離せない。二二世紀の日本の命運はアジア諸国との「間合いのとり方」に決定的に依存している。メコン地域とのさらなる官民協働を、アジア全体の動態構図を踏まえて一層大切にしたい。

(よしだ つねあき／東京大学大学院新領域研究科教授)